
今一度、貴方に

さゆ&梨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今一度、貴方に

【Nコード】

N3161Y

【作者名】

さゆ&梨

【あらすじ】

ヒトリにしないと、誓ったはずだった。（例え、この想いが通じずとも、）決して彼を、己達の為に茨の道を選んだ彼を、誰かの為にしか生きられなくなってしまった彼を、ヒトリにしないと。

…誓いは破られ、彼等は“大きな悔い”を残して死んだ。――
そして彼等は、再び、

初めに

ちょっとした忠告です。

このお話はボーイズラブというより年齢的にメンズラブかもしれませんが。

とはいえ、肉体的には年上×年下。その差約十。しかし精神的には逆転どころか年下が幾回りも上という…考えちゃいけない。彼等は子供。子供ったら子供。

綱様総愛され。書いてる人は総受も総攻も両方イける口ですが（色々表現がおかしい）最近の攻派に傾きがちです。でもたぶん、どっちでも読めるんじゃないかな…？

タグ見てる人はわかってるかと思いますがアルコバレーノは大人化してます。大空はルーチェさんかアリアさんにしたかったんですが、上手く書ける自信が無かったのでユニ。

ヴァリアーの大人組は綱さんよりちょっと上くらい。原作みたいに一回りも上ではないです。跳ね馬も同じく。

あー、ランボはさすがに犯罪的年齢差になるので他の守護者達と同年代くらいまで引き上げてます。

白蘭と入江正一は出てきますが彼ら以外のミルフィオーレ関係者は出てきません。

…あ、何だかんだ言ってますが露骨表現は無いです。愛人がどうのこうのって話はしてますけど。救いのない話になりかけてたらさゆに「やめれ」って言われたので頑張ってハピエン路線でいきます。

シリアスだけど。

でわでわ。

初めに（後書き）

B
y
梨

大空の勘

「ツナ、早く守護者決めねーと幹部どもがウルセーぞ」

「…リボーンが勝手に決めていいよ」

「あゝあゝ？」

シックなインテリアでコーディネートされた、深い渋みを持つ執務室。

それなりの付き合いとなる家庭教師様に睨みつけられた生徒は、執務机に両手を組み頬杖をついていたのをやめて肩を竦め、くるりと振り返ってそこにある大きな窓から空を眺めた。

時は夕暮れ。 彼が一番、スキでキレイな時間だ。

「…焦らなくっても、向こうからきつと現れるよ」

「……そりゃ、勘か？」

「まあね」

ぽつりと呟くように言われた言葉に、リボーンは少々疑うように問うた。そして彼は、あっさりと返事をする。

「今必要なのは、探すことじゃない。…見つけた時に、受け入れられる体勢を作ることなんだ…」

言いながら両手を握るように組んだ彼は、そこに光る指輪を見て、やや暗く笑った。

「……………守れるなら…」

どんなことでも、するから。

組んだ手を祈るように額に当てた彼に、リボーンは言葉を失くす。

この決して強いとは言い切れない頑固な生徒が、決して望んでいなかった茨の道を選んだ理由を、誰よりも、知っているから。

その決意を、覚悟を、固めたその時から、決して読めなくなった彼の心を、これほど知りたいと思ったのはいつぶりだろうかともどかしい思いに駆られながら、リボーンは静かに部屋を後にした。

雨の場合

『——…ナ、…め、』

『謝らないで、……オレは、大丈夫だから』

ごめん、ごめん。本当に、ごめん。誓ったのに、オレは、絶対に、お前を、ヒトリにしないって———

ジリリリリリ！！！！！！

「つつっ！！！」

飛び起きて、目覚ましをストップする。時刻は六時半。朝のトレーニングの為に着替えをして、軽く身体を動かしつつ朝の仕込みをしている父親に一言声をかけ、彼は家を飛び出した。

（また、夢…）

滲んでいた涙。顔を洗ったときに流れてしまったが、その感触はずっと残っている。

（何なんだろうな…？）

幼い時分からずっと、彼はその夢を見ていた。しかし、内容はいつも同じとは限らず、しかも全て覚えられてはいない。

覚えているのは、自身が物凄く後悔していたこと、ただそれ一点のみ。

（けど何を後悔してたのか思い出せねーんだもんなあ…）

それじゃあどうしようもない、と彼は内心溜め息をついた。

「どうしたんだ武、晴れの日になんな暗い顔して？」

「…何でもねえよ親父」

「そうか？」

ああ、と応える彼は、今日、中学に入学する。

すぐに成長するからと、少し大きめに作ってもらった真新しい制服に手を通す。ぶかぶかだが、すぐに小さくなると言われているのでそんなもんか、と彼は納得していた。

彼の中学の入学式は昼からだった。朝は素振りなどして時間を潰しつつ、昼食を取ってから家を出た。

「おー、人一杯だ」

途中、同じ小学校の知り合いと出会い、和気藹々としながら向かう。中学校までの道のりは、そうわかりづらいものでもない。けれど、彼は何か違和感を感じた。

（こーゆーの何て言うんだったか…）「あ、そうだ、デジャヴ？」
「何だそりゃ？」

「何かこれ見たことあるなーって景色のことだろ？　それがどうかしたのかよ、山本」

「んー、何か見たことある気がするんだよねー」

前に通った時は感じなかったのになー…、そう思った彼は、以前通った時との違いを考える。

（…制服を着た奴ら）

以前通った時も人はいた。けれど今回は何より、制服を来た人間が数多くいる。というかそればかりだ。

（何だ、この胸騒ぎ…？）

ドクドクと、心臓が鳴っているのを強く感じて、彼はそっと胸を押さえ顔を少し俯かせた。

「お、校門が見えたぜ！」

仲間の誰かの声に、顔を上げる。　：そして、瞠目した。

涙が、止まらない。

「お、おい、どうしたんだ？」

彼は思い出した。全て。

「山本っ!？」

“唯一無二の人”。尊敬し至上の愛を人知れず捧げた相手。

「ちょっ、大丈夫か!？　どっか悪いのか!？」

『沢田綱吉』のことを。

くらり、と彼の身体が傾き、彼は気を失った。

それは、前世の記憶。

中一の秋に知り合った親友とは、前世の彼が死ぬその瞬間までの殆どの時間を共に過ごした。

彼はいつの間にか、親友に対して、友愛をある意味超えた、深い愛を覚えていた。

しかし、親友は中学時代の初恋をずっと引きずっていた。

相手の彼女の方も、親友のことを憎からず想っていたようだった。それは誰に目にも：親友の目にすら明らかで、いい加減告白しちまえと、多くの人に言われていたのを知っている。

けれど結果的に、親友は想いを告げることはしなかった。

『苦しめたくない。：オレは、弱いから。一緒にツライ思いをして、なんて、言えない』

その頃は“元”がついていた家庭教師に凄い勢いでどつかれ、親友が言ったのはそんな言葉だったという。

確かにその頃状況は捗々しくなかった。婚約、結婚と進んでいれば、親友も彼女も苦しい思いをすることになっただろう。

……そしてしばらくして、状況が良好になった頃には、彼女は良縁を見つけとくに結婚していた。

『京子ちゃんが、幸せなら、それでいいんだ』

そう言った親友は、恐らく殆ど意地で自身以外のボンゴレの血を引く血筋を見つけ、その子供を養子として生涯独身を貫いた。

そんなことをしても無駄だと言う者の多い中、親友は決して折れなかった。：それが、ボンゴレ十代目となってから、親友が一番頑固を貫いた瞬間でもあった。他の面では大抵譲歩していたから。

彼は、そんな親友を狂おしい想いを抱えてずっと見つめ続けた。

『山本の笑顔は、何だかほっとする』——だからできるならずっと笑っていて、そう願われた思いに応え、可能な限り親友のソバで笑顔で在り続けた。

共に戦った友人達——守護者——が、親友が次代に役目を譲り渡したのと並行して、まるで己の役目を終えたかのように死んでいくのを見て、悲しむ親友に戦慄を覚えるまでは。

親友は、“みんな”の為に茨の道を進むことを決意、覚悟した。
：では、その“みんな”がいなくなれば：、彼は、どうなる？

何だかんだ言って霧としての役目を担い続けた男は、元より人体実験のせいで真の意味で丈夫ではなく、かなり無理をしていた。とつくに男の仲間とされていた部下の男二人は死しており、女性二人は男の死の後を追うように亡くなり、残る弟子はふらりと姿を消した。

妹夫婦を大切にしている、自身も結婚していた晴の役割を担っていた男は、孫の姿を目にしてから静かに息を引き取った。

生まれたファミリーの一員としての役割と雷の役割を兼任していた男は、親友に説得され元のファミリーに戻ったが、結局ボスを庇って当たり所が悪かった為に死んだ。

決して完全にファミリーとして相容れることは無かったが、立派に雲としての立場であり続けた男は、親友が引き継ぎを終えると同時に日本に帰り、その数日後に猫のように姿を消したという。遺書とも遺言ともとれる内容の文書が残されていたそう。

最後の最後まで、彼と、嵐は：名実右腕で在った男は親友のソバに居た。

だがある日、親友が命を狙われ、嵐の役割を担っていた男は親友を庇って死んだ。：遂に、二人だけとなった。

正直、ほんのすこし、歓喜した。狂喜した。

親友にとっての“みんな”はもう自分だけなのだと、彼は内心暗い笑みを浮かべたのだ。勿論、それを表面化することは無かった。危険だからと、二人だけでナニモノからも逃げ続け、最終的に辿りついた地で彼は病に罹った。：不治の病だった。

誓ったのに。自分だけは、ずっと親友のソバに居るのだと。彼の存在意義で在り続けるのだと。：悔しかった。悔しかった。

泣きながらに、謝って。悔しいと心の中で叫んで。――そして、彼は、死んだのだ。

「……ツナ…」

あいたい、と呟く。心が叫んでいる。今度こそ、今度こそと。

「起きたの？」

「はっ、はあ…、」

声をかけられ、彼は自分がどこにいるのか一瞬把握できなくて戸惑い、そしてすぐに気付いた。

——保健室だ。聞こえてきたのは女性の声で…その違いにすら、涙が出そうだった。

「大丈夫？　もしかして興奮して眠れなかった？」

「そういうわけじゃないんすけど…」

ふと視界がやや滲んでいることに気付いて、ああまた泣いたのか、と彼は少し乱暴に拭う。

「なら良いけれど。無茶は駄目よ？」

「……ハイ。…あの、」

「もう入学式なら終わったわ。ちょうど教室で連絡を受けてる頃だと思うけれど…」

行く？、と問われ、彼は逡巡した。

行けばもしかしたら、また親友と会えるかもしれない。…もしかしたら、だけれど。例えば同じクラスじゃなくても友達にはなれるし。

「…行きます」

「そう。ええと確か君は、」

「山本武っス」

「そうそう。…一年A組ね。教室は二階よ」

「あ、ありがとうございます。…あの」

保健医らしく白衣を着ている彼女が、名簿を見ながら言ったので、彼はふと聞いてみた。

「同じクラスに、“沢田綱吉”っていませんか？」

「さवादつなよし？」

「ハイ」

にこやかに尋ねた彼に、保健医は困ったように、どうして？と聞いた。

「…気になって。あの、やっぱいいっす」

よくよく考えれば、言うわけにはいかないのかもしれないと、彼は引いた。が、あっさりと彼女は教えてくれる。

「…いないわよ。貴方のクラスにも…他のクラスにもね」

「え？」

「全く…」

ぶつぶつ、と続けて何か言っている彼女の言葉は彼の耳に入って来なかった。

（ツナが、ココに、いない…？）

その可能性は、考えてもみなかった。

それから彼は必死で“沢田綱吉”を探した。だが、学校中のどこを探してもいなかった。

次に彼は風紀委員会と接触した。入学式の日、涙が出た一因は校門前に立つあの黒服の集団もあったと思ったからだ。

見覚えのある風紀副委員長に、風紀委員長と会わせてくれと交渉したが、無駄だった。

ならば目の前の彼は自分を覚えていないかと質問してみたが、結果は芳しくなかった。

「ツナ……」

あいたい。あいたい。あいたい。

思考を埋めるその言葉にぼんやりと歩を進めていけば、ふと気付くと見覚えのある住宅街に居ることに彼は気付いた。

「…このまま行けば、」

ツナん家だ。

眩きは声にならなかった。何かの衝動に駆られ、走り出す。その家に辿りついた頃には、辺りは真っ暗で息も切れていた。

「ツハ、バカじゃねーか、オレ……」

暗がりでもよく見えない表札に、段々と近づく。妙な胸騒ぎ。これで違っていれば、諦めるしかないかと、そう思いながら。

「…え」

だが、奇しくも。――そこには、見覚えのある『沢田』という表札がかかっていた。

「え、あ、」

震える手が、思考すらするまでもなく呼び鈴を鳴らした。少しして、懐かしすぎて涙が出てきた女性の声が、『はい、どちらさまでしょうか』と聞こえてきた。

「あ、の…、ツ、…沢田綱吉さんは、いらっしゃいますか」

草壁氏が何も覚えていなかったことを鑑みて、彼は愛称で親友を呼ばず、敢えてフルネームを使って問うた。

『ツツ君はお仕事でいませんけど…どちらさま？ その制服…並中のよね？ いくらツツ君がOBとはいえ、年が離れすぎているし…』

聞こえてきた情報に、彼は思考が停止するのを感じた。

OB。それって、あれだよな、ツナがもう、並中を卒業してる?? つつーか仕事って…働いてる…?

やがてぐるぐると頭の中で巡回し始めた言葉に、だいぶ沈黙が続いていたことに気付いた彼は慌てて言った。

「あ、のっ、オレがツ、綱吉、さん、を一方的に知ってるだけでっ、
…どうしても会いたくて、来たん、です、けど…」

『あら…そうなの？ ごめんなさいね、ツッ君今外国にいるのよ。
お仕事が忙しくて…中々会いに来てくれないんだけど』

(外、国…)

それはイタリアですかと叫んで問いかけかけた。…しかし堪えた。
きつと彼女は知らない。親友が、そして彼の父が、決して彼女に教
えようとはしなかった。これで余計なことを言っただけに迷惑などか
けたら、彼は自分を許せない。

…それに、もし、親友が、再びマフィアになっているとしたら。

(…もう一度、お前のソバへ)

躊躇いはしない。

「あの…連絡先を入れておくので。綱、吉、さん、が日本に戻っ
きたら、教えてくれませんか」

『…うん…でも、それは』

「じゃあ、会いたって言った奴がいたってことを言っとくだけ
でも良いです！ オレ、竹寿司のこの息子の、山本武です。」

『あの、お寿司屋さん？』

「はいっ」

『…そう。わかったわ』

ほっとして、彼は膝から崩れ落ちそうになった。

それから、息苦しい毎日を過ごした。

親友は彼が野球をすることを推奨していた。再び親友のソバに在ることが人生の目標を通り越して目的に成りつつある彼だったが、手は抜かないでおこうと思い、ずっと続けてきた野球の為の特訓はやめなかった。

しかし、父親に願い出て剣道の稽古はつけてもらった。

二度目の技の継承。失敗などするはずもない。

野球と剣。どちらも手を抜くことは無く、ただひたすら、もう一度親友のソバに行く為に、彼は過ごしていた。

ある日、わっかんねえ…と呟きつつ宿題と格闘していた彼は、電話の鳴る音を聞いた。

「武、悪いが出てくれねえか？」

「わかった！」

あっさりと返事を返し、彼は走るように電話へと向かい、「はい竹寿司です、」と取った。

『もしもし？ 並を二人前お願いしたいのだけど』

その声に、耳を疑い、そして慌てて返事をした。

「は、はいっ」

『…もしかして、武君?』

「うあ、はい、ソウデス…」

思わず片言になりながら返事をすれば、…親友の母であるその人は、くすりと笑って続けた。

『ちょうど良かったわ。…ツツ君がね、久しぶりに帰って来るって連絡があったの。今日ね』

「…え？」

それ、は。

『貴方の伝言、伝えたわ。是非会ってみたいんですって。もし今日暇があるなら、お寿司を持って、いらっしゃい』

ああ、その場合は三人前にしてね。

「…っはい!! 一人前はサービスにします!!」

『あら、良いのよ?』

「いえ、むしろオレからお願いしたいくらいなんで!!」

『そう? …あんまり断ると、良くないかしらね。じゃあお願いするわ。今夜七時ね』

「はい!!!!」

がちゃん、と切ってから、はっと振り返った。

「何勝手にサービスしてんだ?」

「う、親父…その、悪い」

やや厳しい顔をしている父親に、向こう一年小遣い無くても良いから、と続けつつ、彼は目線を落とした。

「…はあ。お得意様か？」

「…違う。新規、だと思う」

「何でそんなことをした？」

今、“お前からお願いしたいくらいだ”とか言ってたな？

どこから聞いていたんだと思う気持ちと、自分も興奮していたからデカい声で喋ってたような気がするし、聞こえていても当然かと思う気持ちとが一気に襲いかかり、彼は一瞬口ごもってから、言っ

「…：もう、後悔したくないんだ」

それは、父親に稽古をつけて欲しいと言ったとき、理由を問われ告げた言葉。

「…なるほどな。そっちの覚悟へ繋がってんのか」

「そうなんだ。…チャンスなんだ。もう一度、アイツに…、もう二度と来ないかもしれないんだ…！」

激情に駆られ父親を見上げる。…そして、静かに見下ろしてくる瞳に、心が冷えた。

「…わかった。それで？何人前だ？」

「並、を三つ。…オレも、一緒に、って言われたから、」

「わかった。久しぶりのご新規様だ、ちゃんと感想聞いて来いよ？」

「…っ ああ!!」

ほっとした。肩に入っていた力が抜けて、彼は慌てて支えを探して壁に懐くことになった。

こんなに緊張したのはいつぶりだろう、と思いながら、彼は沢田家の呼び鈴を鳴らした。

はーい、と奈々の声が聞こえ、扉が開かれる。

「いらっしやい」

「お邪魔、します。 …お届けにありがとうございました」

「はい、受け取りました。 お金は後でも良いかしら？」

「良いっスよ。」

「それじゃ。 ツツ君ならリビングにいるわ」

そこよ、と指されて、もう一度お邪魔します、と呟いてから靴を脱ぎ、恐る恐る彼はリビングへと近づいた。

「…ん、お客様？」

まだ声もかけないうちに、見えてきた、座ったままの後姿が振り返る。 …聞こえてきた声は、やはり想像していた通り…成人後の、親友の声だった。

「……ナ、」

「ああ、君？ オレに会いたって…。 ……、どうしたの？」

カタカタと震える身体。

ああ、また、あえた。

ポタリ、

「っ！？　どうしたの？！」

「…ナァ…！」

慌てて立ち上がり近づいてきたその人に、彼は抱きついた。

以前は彼の方が高かった身長も、年齢差があるからだろうか、その人の方が高い。

「…大丈夫？」

涙が出て止まらない彼の頭をそっと撫でながら、その人は問う。

（んな、こと、されたら…もっと、止まらねえ…っ！）

笑うことを“望まれた”。強要されたわけではない。でも望まれた、願われたからこそ、彼は自身にそれを課した。

嵐の男が、たまに泣いては親友に慰められているのを、どこか羨ましく思っていた。

「…我慢、しなくていいよ。」

やがてふう、と息を吐きながら言われた言葉に、彼はぎゅ、とその人を更に強く抱きしめた。

「オレは、ここにいるよ。　…ねえ、君の名前、教えてくれる？」
「…ふ、」

知らないのかと、聞きたかった。知らないのだろうかと、わかっていた。

だから彼は必死で涙を拭いながら、答えた。

「山、もと、たけし、です」

「たけし君。…知ってるみたいだけど、オレは沢田綱吉。ちょっと海外で色んな仕事シテマス。」

視線をあわせて、少し茶目っ気を入れて言われた言葉は、含まれたものを感じさせた。

それと同時に、彼は妙な気分になった。

（名前…）

特に互いに変えようと思わなかったから、親友は前世の彼が死ぬその時もずっと彼のことを名字で呼んでいた。

だからか、妙に感慨深い。

「…並中の、一年生です」

「うわぁ、並中かぁ、なつつかしー」

にこにここと、言われた言葉。その笑顔は、記憶にあるものと、全く変わらないもの。

「さあさ、お寿司食べましょー」

何か言わなければ、と口を開きかけて、絶妙なタイミングで入っ

て来た目の前の人の母親に、ちょっと残念な気持ちになった。

がしかし、うわぁ旨そう、と喜びを露わにするその人に、彼の脳裏に父親の言葉が蘇る。

やがて言われるまま、彼は供に食事を始めた。

そして、夕食を終えた後、その人は彼に爆弾を落とすのだった。

「ちょっと、イタリアに小旅行してみない？」

雨の場合（後書き）

この先多分出てこないのでも知らなくても良い補足。実は保健医さんは綱さんと並中期生。同じクラスにもなった仲。

晴の場合

その覚悟を疑うようなことをしたことを、ずっと悔いに思っていた。

『お義兄さん、二人を連れて、逃げて』

『だがしかし、』

『お願いです。…ここで妻が子供が、喪われるなんて、堪えられない』

その目。いつだって真剣に見つめてくるその強い瞳に引きつけられ、わかったと答えた。

だが妹を、甥を、安全な場所に逃がしてから、彼は不意に不安に駆られたのだ。

彼は大丈夫なのかと。生きて帰って来るのかと。

今や残る守護者は彼一人だった。周囲の反対を押し切り彼の妹と結婚したボスに、他の守護者達は弁護したくてもできない立場に追いやられていた。

内心では彼の義弟を助けてやりたくとも、様々な柵がそれを許さなかった。故に、味方となれるのは彼一人だけだったのだ。

後から考えれば、余計なお世話の責任感。

しかし彼は良くも悪くも真っ直ぐな男だった。思うままに行動し、そして、

『お義兄さんつつっ!!!!』

義弟のその目の前で、死んでしまった。

「…ん？」

聞き覚えのある特徴的なエンジン音に、ああ里帰りした彼^かの人が帰って来たのか、と彼は整理していたファイルを近くの机に置いた。振り返ればすぐそこにある窓から、外を見てみる。尤も、ここから彼の人の姿が見えるとは到底思っではない。

真の金持ちなだけあって、彼の人の持ち物である建物は殆どが横に広く作られている。ファミリーの本部である『城』もまたそうだった。

「…さて、これをヒバリへ回しておくか」

彼は無論、今も昔も書類整理等、事務作業は苦手だ。しかし、今やファミリー内で何をしでかさわからない唯一の暴君と化している雲雀恭弥と、ともに相対出来る数少ない人物であった為、そのような仕事が回されている。

コンコン

「誰だ？」

「オレだ」

重々しい扉が不思議な程軽快に開く音ともに入って来たのは、かつて――勿論前世で――の地位を取り戻さんと奮闘している、銀髪の少年だった。

「十代目が呼んでらっしゃる。一段落したら来い」

「ああ、ちょうどこれをヒバリに持って行くところだ。すぐ行く」
「わかった」

共に部屋を出、そして二人は別れた。

「…相変わらず、極限不機嫌なことだ」

たった今出てきた扉の前に、ぽつりと彼は漏らした。…誰のことかは言わずもがな。かの暴君である。

「まあ、仕方ないのかも知れんがな……」

呟きつつ、彼の人の待つであろう部屋へ向けて歩を進めだす。

彼が全てを思い出したのは、中学入学を目前に控えた春先のことであつた。

季節は春だが、実際にはまだまだ冬と言って良いほど寒く、蕾の気配がようやくし始めた桜の下。そこでかの暴君と再会した時、彼もまた、幼い時分から見続けてきた夢の全貌を思い出したのだ。

（焦がれ続けた相手に忘れられ暴走……、極限、あの時の奴の姿は忘れられん）

時を同じくして思い出したのであろうかの暴君は、茫然としていたかと思つたら次の瞬間から暴走しだしたのだつた。

まだ風紀委員長として全盛ではなかったのだが、持ち得る全ての権力を駆使して“沢田綱吉”を見つけ出した。

言われたままに行動しつつも、彼の存在と敬愛する上司の暴走に困惑していただろう風紀副委員長の姿が不意に思い出される。

草壁氏は、元より妙に達観した雰囲気を持っていた上司が一変して危うい空気を放つようになったことを、それはそれは心配していた。

だが一部下でしかない為に出来ることは少なく、たった一人、唯一上司が耳を貸す相手である彼に諸々を託した。

尤も、託された方はどうしたものかと悩んでしまったのだが。

それでも、“沢田綱吉”を発見し、イタリア行きのチケットを用意させられたとかの部下から連絡を受けた時は、自分の分も用意するようお願い、その上でかの暴君を何とか説得して二人でここま

で来たのだ。

(……ヒバリのことだからな。俺がいなくとも極限何とかしただろうが)

だがしかし、居て損は無かったはずだ、と一人勝手に納得しつつ、彼は辿りついた扉の前に立ち、一呼吸置いてノックをした。

「入って」

聞こえてきた言葉に、気付かず詰めていた息をほう、と吐きつつ扉を開く。

そこには、彼の人、銀髪の少年、そして……もう一人。

「山本?」

「先輩!」

「あ、やっぱり知ってるんだ」

互いに驚愕の声をあげた彼らに、彼の人はずっと驚いていない様子で言った。

「……日本で会ったそうだ」

不機嫌……というよりは無然とした様子で言う獄寺隼人に、内心首を傾げつつそうか、と呟くように彼は言う。

「先輩がここにいて……もしかしてヒバリもここにいないのか?」

「恭弥君? いるよ?」

「……」

「え、何武く…じゃなかった、武」

パツと心なしか嬉しそうな顔をする山本武に、彼は内心傾げていた首が更に傾くのを感じた。

「…：なあ…そろそろ、教えてくんね？ ツナは、何も覚えてないのか？」

「うーん、ここにいるみんな同じこと言って来たけど、オレはさっぱり。」

「そ、か…」

途端に沈む少年に、彼は口を開く。

「見ての通り、獄寺もヒバリも俺もいる。ランボもいるらしいぞ、俺はあったことないがな」

「…もう一人は？」

「アイツなら、行方はよくわからん。…アイツのいたはずのファミリーなら、今傘下だ」

「…っ！？ マジかよ！？」

「大マジだ」

彼の後を引き取った獄寺の言葉に、反応する山本。

仮にも皆前世でマフィアとして生きていた者達だ。意味するところはずぐにわかる。

「うーん、中学生達があっさりこんな会話するなんて世も末だな」
「揶揄わないでください十代目」

「いやオレもマジなんだけどね。 ってことはやっぱり、武もマフィアのボスだったオレと一緒に過ごした記憶とやらがあるわけだね」
「あ、あ…ツナは、ほんとに、ないのか…」

「残念だけどね。まあそういうことだから、少し交流を深めとくと良いよ。オレは恭弥君のご機嫌取って来る」

そう言いながら立ちあがった彼の人に、彼は少し慌てて言った。

「かなり不機嫌だったぞ、下手をすると…」

「さっき、トレーニング場に来るよう伝えたから。じゃ、また後でね」

ひらひら、と手を振って部屋を出て行った彼の人をやや茫然と見送ると、彼の後方でほう、と陶然とした溜め息が聞こえた。

「「かっこいい…」」

「…お前ら」

確かに、所謂大人の魅力とやらがあって、モテているのだが。

「……ところで、山本はどんな最期だったのだ？」

しばらく額に手を当てていた彼だったが、陶然としたままの二人に呆れを通り越して疲れが出てきたので、話題を振ってみた。

振られた方といえば、“さいご”のニュアンスに気がついたのだろう、首を傾げつつ言った。

「オレが不治の病に罹って、ツナに見送られました。それが？」

「沢田を“ヒトリ”にしたことを後悔したか？」

「!? それを…なぜ」

「簡単だ。俺達…今は違うからな、元守護者とも言うか。皆、“『沢田綱吉』をヒトリにしたこと”を大きな悔いとして転生していることがわかってるからだ」

彼の言葉に、ソファに浅く座っている山本は傍らに突っ立っている獄寺を見上げた。

「…ああ、オレもだ」

頷き答えた獄寺に、山本は茫然と呟く。

「それ、どういう…」

「つまりはな、オレ達みんな、違う世界から来てるらしいってことだ」

「……ハア？」

「俺の前世では、沢田は京子と結婚し、息子がいた」

彼がそう言うのと、完全に山本は固まった。

「…や、だって、結婚はしないって、いやしなかった、はず…っつか先輩死んでたし…笹川別の人と結婚したし…」

「ふん。死別にしろ他の理由にしろ、誰もが自分以外の守護者が十代目の傍にいない状況で自分が死に、ヒトリにしまった後悔を抱いてこの世界にいるってことはわかってんだよ!!」

キレるように言った獄寺に、彼はその肩を叩いて宥めつつ、やはり固まっている山本へ言葉をかける。

「彼の傍にいたいのなら覚悟しろ。相手は手強いぞ。何せ、約十も上だからな」

もう一度守護者という地位に就きたくとも、今の俺達では年齢が幼すぎて相手にされん。

「…覚悟なんて。ツナの傍にいれんなら、いくらだって捧げてやるよ」

彼の言葉に、生まれながらの暗殺者と評された男の目にもすれば危険な光が宿る。

「それなら良い。」

「…テメエ、何考えてやがる」

獄寺の陰のある言葉に、彼は肩を竦める。

「何も。極限わかってしていることは、恐らくこれが俺の役目なのだろうということだ」

「「はあ??」」

説明を求めるような目つきをする二人の横を通り過ぎ、窓の前に立つ。

そこから見える真っ青な空に、彼は思いを馳せる。

(…『明るく大空を照らす日輪』、その役割)

彼の人は何か悩んでいる。…否、^{いや}企んでいるとも言おうか。

そんな彼の人の行く先を照らすのが、自身の役割だと彼は知っている。だからこそ、余計なものは排除しなくてはならない。

(覚悟の極限無い者を傍に置くわけにはいかない…)

そう言い訳しつつも、山本武を試したその理由は、それだけでなかった自身の思いに彼は薄々気づいていた。

多くの敵と味方との前に立ち、敬愛され憎悪される、我らがボス。
彼の人への思いは、義弟に対する思いが多少強くなっただけのものだと彼は思いこんでいたのだが…

（…あるいは。）

彼の人と出会い、何も知らないと告げられ、彼が茫然とする横で暴走した雲雀恭弥。

今や『暴君』という言葉が代名詞となりつつあるその男が、暴走した勢いで彼の人につけた浅い傷。
それを見た瞬間、身体中が沸騰したように熱くなって、気付けば力尽くでかの男を叩きのめしていた。

（…同じところだったからな…）

前世の彼が、死ぬ直前に見た、沢田綱吉にあった傷、と。

雲の場合

『どうせ死ぬ場所は貴方の傍でしょうから、その時は塵一つ残さず燃やしてくださいね』

『うざい』

『クフフ、つれないですねえ』

何故、その言葉を実行しなかったのかと、悔やんだ。

『“塵一つ残さず”…？』

『そうだよ。君がやってあげれば』

『でも…オレじゃなくて、ヒバリさんがやってあげた方が』

『いいから。君がやりな。…来るよ、さっさとしなよ』

何故、あの時そんなことを強要したのかと、悔やんだ。

『…………骸…』

あんな顔をした君を、見てしまった自分を、憎んだ。

『ヒバリさんっ ヒバリさんっ!!!!』

そして…、死ぬ間際に見てしまった君の顔を、この上なく愛おしく思ってしまった自分を憎み、同時にそんな顔をさせてしまったことを、凄く凄く凄く――後悔した。

カラアン…

「…余所見でもしていたのか？」

闘う時は、彼の記憶にあるものと同じく、印象が変わる目の前の男に、彼はただ無言を返す。

吹っ飛ばされた片方のトンファーは無視をして、もう一つ取り出した。

「…本当に四次元ポケットでも持っているのか…？」

「何言ってるの」

『ヒバリさん、そんなにトンファーどっから出してるんですか…？』

不意に蘇った声に気を取られかけ、何とか持ちこたえ今度は吹っ飛ばされずに済んだ。

「…気になることがあるなら、やめるか？」

「っ やめないっっ!!」

目の前の、橙色の炎を額と両手に灯す男との闘いは彼が望んだこと。いつだって目の前の男の都合に左右されるが、それでも彼は、この時ばかりは彼のことを見て、彼のことしか考えていないだろうという事実には酔いしれるというとても不毛な想いを抱いている。

「恭弥」

名前を呼ばれ、がしつと得物を掴まれ、様々な意味で彼は固まった。

「落ち着け。俺はここにいる」

「…っ」

真っ向から向けられた視線。瞠目し、身体の強張りには更に酷くなる。

「どうした？」

「……………何でもない…夢見が、悪かっただけ」

今も昔も、不毛な想いを抱いていると知らしめる、不愉快な夢を見ってしまっただけ――

俯いた彼に、ふ、と息を吐くと、男は力を弱め、同時に炎を消した。

「っ 何で、」

「そんな状態で闘っても、納得のいく結果にはならないでしょ？」

お茶でもして気を静めよう。ここからなら恭弥君の部屋の方が近いね」

それに今オレの部屋は、了平君達がいるし：

「：彼と駄犬以外にもいるの？」

「ん？うん。日本に行って会ったんだ、山本武って子。恭弥君も知ってる？」

「：知ってる」

彼は知ってて、言わなかった。日本に残してきた、部下から連絡はあったのだけれど。

「後一人、っぽいね。そしたら六人：守護者とおんなじ数か」

「：君、それ、わざと？」

「ん？何が？」

トレーニング場の扉を開きつつ言った男の言葉に、何か含みがあるような気がして彼は言ったのだが、相手はさすがは大マフィアのボスというか、読めない。

（：彼なら簡単に読めたのに）

綱吉、と口の中で呟く。脳裏に思い描くのは、前世の記憶の中に在る存在。

「さて、あー、ここって紅茶しかないんだっけ」

「…僕が淹れるよ」

「あ、ほんと？よろしくね」

オレ砂糖一つね、と言いながら勝手にソファに座る男に、彼は内心溜め息をつく。

「恭弥君って丸くなったよね」

「…何が」

ぽつりと言われた言葉に、反射的に返す。

「だって出会いはあれじゃん？」

「……」

彼にとっては思い出すのも忌々しい、三人掛けソファに一人で寛いでいる男との初対面。

「まー、あんな出会いだったからこそ、君達をファミリーに入れることを了承させることもできたんだけど」

真剣に今時の小学生どうなってんだよって呟いたらリボンにアホかって凄い勢いで突っ込まれて痛かったな！。

たった一年ほど前の話を、物凄く懐かしそうに語る男に、彼は内心毒づく。ついでに聞こえてきた男の元家庭教師にはエールを送っておいた。

「たった二人で見た目小学生が乗り込んできて。見た目小学生の癖に大の大人と渡り合うだけの強さで。オレに会わせろって聞かなく

て。」

ザンザスが後から聞いてマジギレしてたなー。あれ引き留めんの
大変だったよなー。

(…そうだったんだ)

「いざオレと会ったら自分達のことを知らないかって聞いてきて。
知らないって答えたなら暴走しだして」

「…………はい」

「あ、ありがとう」

にこっと笑顔で受け取られ、その笑顔に前世の記憶にあるものと
同じ気配を感じて息を吞むが、次の瞬間には失われていて。

「で、了平君が恭弥君のこと止めたんだよね、力尽くで。」

いやぁ懐かしい。と呟く男に、はあ、と盛大に溜め息をついて見
せつつ、彼は自分の分を一口口に含んだ。

「あんどき、実は超メンドクサイ連中の相手してるところでねー。
君達の乱入のおかげで色々事なきを得たから万々歳だったんだけど、
無茶苦茶苛々しててさー」

「…そうだったんだ」

「うん。それに隼人とかととっくに会ってたし、もしかしたら君達
のも同じかなとは思ってたんだけどね」

「…?」

「つまりはね、」

あの時のあれね、八つ当たり。

反射的に投げつけたトンファーは、軽々と受け止められ、彼は何か疲れて身体から力を抜いた。

「投げちゃ駄目だよ、ほらいいこいいこ。」

頭を撫でられ、何とも言えない気持ちになりつつ、どこか心地良い温度に彼は目を閉じた。

気付いた時には、沢田綱吉が気になってしょうがなかった。

彼がそれとなく見つめ続けていると、綱吉も見つめている相手がいることに気付いた。…六道骸だった。しかしその男も見つめている相手がいた。

…自分、だった。

その衝撃は、あの自分が学校に行くことを忘れてしまうくらいに酷かった。

心配したらしい副委員長が家まで来たことで、彼は自身の状態に気づき、自嘲した。

しかし、現状が分かったからといって、今更何とかできるような想いでもない。

何て、不毛な ———

考えるだけ無駄だとわかっていても、考えずにはいられなかった。距離を置いて、自然と相手の気配がすれば窺ってしまう。それに、忌々しい男は自分にまわりついてくる。そして綱吉は喧嘩を始める自分達の元へやってくるのだが、その視線はやはり殆どあの男に向いていて…。

クルシイ。苦しい。息苦しい。イキグルシイ。

死にそうなくらいだ、と思っても、愛しいと思う心は捨てられなくて。不毛だと、馬鹿なことをしていると思っても、忌々しい男と武器を交えれば、少しでも自分を見てくれる愛しい相手の視線に酔いしれた。

彼の最も強い衝動は戦闘に対するものだった。それは、想いすら超越して…あるいは、超越させて。忌々しい男との間に、喧嘩をやめさせるために入ってくる愛しい相手との闘いに、この上もなく身体は悦んだ。

やがて、愛しい相手は多くの困難を経てマフィアの頂点たるボン

ゴレファミリーのボスとなった。

日本を離れるのは嫌だったが、彼にとってそれよりも嫌だったのは愛しい相手との離別だった。勿論、風紀財団を立ち上げボンゴレとの繋がりはちゃんと得ていたが、個人的な繋がりがなくなりかねないのは宜しくなかった。

その為に、彼はその残りの人生の殆どを海外で過ごしたのだった。

ボスとなった後も困難ばかりに恵まれてしまったかのファミリーは、まず初めに『全てを洗い流す恵みの村雨』を失った。そして殆ど間をおかずに『激しい一撃を秘めた雷電』を。しばらく時を置いて『明るく大空を照らす日輪』を。またしばらく時間が空いて、粘りに粘った『荒々しく吹き荒れる疾風』を。

残った二人：三人と、我らがボスは孤立無援の状態で抗争に至った。敬愛する人を庇って『実態のつかめぬ幻影』の片割れが死に、庇われた方は彼を――『何者にもとらわれず我が道をいく浮雲』を庇って死んだ。

そして庇われた彼はといえば、自分を庇った忌々しい男が昔彼に言った言葉を思い出し、その処置を愛しい相手に任せ自身はその人を庇って死んだのだった。

段々と痛覚すら鈍くなり、ああ死ぬのかと思う意識の中。

好きな相手を塵一つ残さず燃やし尽くした、涙で歪んだその顔を向けて、彼の名を呼ぶ愛しい相手に。

ああ、やっとこっちを見た

そんなどこか仄暗い想いと。

その顔を、僕にも向けてくれるんだ…？

その、得難い喜びとが。

彼を支配し、唐突にそれらは後悔へと変わった。

「恭弥君？」

「…ねえ、君、守護者はどうなってるの」

この一年、聞かずにいたことを、彼は聞いてみた。

「いるけどいない…って感じかな？」

基本無表情だが、目は口ほどに物を言うタイプの彼の、真剣みを帯びた言葉に、男は肩を竦めつつ言った。

「…どういふこと？」

初めて彼らが城に乗り込んだ時。それらしい人間は見当たらず、いかにもな護衛が数名の他は、かの家庭教師が男の傍に控えていただけだった。

一年間、それらしい存在の影は一切感じられなかった。

というかいたら、笹川了平が自分担当にされてなかったんじゃないか？と思う彼なのだが。

「一応ね。オレがボス就任の段階で、早く決めろって結構圧力掛けられたんだけどさ」

カップをテーブルに置いた男は、指輪をはめた手を掲げた。

「こんな呪い染みたリング、適当に選んだ人間に扱えるわけないだろう？」

「……君は扱えてるっていうの？」

馬鹿馬鹿しい、と言いたげな台詞に、男は苦笑した。

（不完全な？バーナーでさえ撃ててない癖に）

彼の思考の通り、男の手に在るのは原型オリジナルのリングであるのに、男は死ぬ気の零地点突破までしか会得していなかった。

それは本人からも確認済みだ。：尤も、？バーナー等の技は必要に駆られた戦いで前世の記憶に在る存在が生み出したもので、同じ状況を全く経験していない男が何もなしに生み出せる技ではないのだが。

「さあね。オレの勘だと元々このリングを思い通りにできるのはオレじゃないと思うけど……。」

「……」

君以外に、ソレを上手く扱える人間がいるとしたら、故人のアノヒトしかいないんじゃないの。

口をついて出かけた言葉は、思わず呑み込んだ。元々、不用意な発言は自然と呑みこんでしまう傾向がある。理由はわからないが。

「何の話だっけ。ああ、守護者か。それでも一応、ずっと封印してくわけにもいかないからさ。仮に、ってことで配ってはあるよ」

オリジナルを持ってるのは、オレだけだけどね

そう言つて最期の一口を飲みきった男に、彼はそう、と返した。

「^{フリーモ}？世の話だと、本当にふさわしい者の手に在るのなら、自ずから枷は外れるらしいけどね」

男がかちゃん、とカップを置いた音がやけに響いた気がして、やや茫然としていた彼はハッとした。

(…つまり、枷を外すことができたら…)

本当にふさわしい者 —— 真の守護者と、認められる…？

男が帰り、再び一人となった部屋で、彼は窓の外を眺めながら考

えていた。

そこから見える光景は既に暗く、外に明かりはさほど存在しない。「あんまり明るくても目立ちすぎるだけでしょ」というのは男の言葉。大抵の人々は夜を警戒するものなのだが、男にとってはそうではないらしかった。

(……ここにいる綱吉は、アイツを好きじゃない……)

しかし彼は、例え男が自身の知る存在とは全く違うものであっても、“同じ”としか見えないその存在に惹かれているのだった。

(……なら。いい、よね)

にや、と、その無表情な顔に僅かな笑みが浮かんだ。

雷の場合

『ボンゴレっ』

一目惚れに近いものがあつたのではないかと思うくらい、彼のこ
としか見ていなかった。

『ん？ どうしたの、ランボ』

そして同じくらい、彼にも見つめられていると知っていた。

『もう、ここに来てはいけない』

『でも……っ』

『お前は最後の砦なんだ。 …中には、お前に特攻させるとか馬鹿
なことを言ってきた奴らがいる。このままじゃ、押し切られる
可能性がある』

『……オレが、他のファミリーの人間だから……？』

『…ああ。 全く、オレの守護者なんてファミリー内から選ばれた
のなんていないってのに……』

それどころかもっと厄介なのばっかだっというのに、年若だから
っただけで……！

『…ボンゴレ、でもそれじゃ、貴方の迷惑になるんじゃない』

『ランボ』

目は口ほどにものを言う。彼は一度だって想いを告げなかった。そして目の前の人も決して何も言うことはなかった。けれども、互いに互いを想いあっていることは、誰よりも、誰よりも、…知っていた。

だからその目に宿るものが何なのか、よく、わかった。

『…わかるね？』

『………はい』

頷きたくなかった。昔のように必死で首を振って、泣きながら嫌だと縋り付きたかった。

でもそれは許されない。そもそもそれが許されるのならば、

———— 二人は結ばれていたはずだから。

『…ボンゴレ、最後に一つ、良いですか…？』

『ん？ 何？』

これで最後ならば。もう、会えない可能性がほぼ零になるというのならば。

『昔みたいに…抱きしめて、もらえませんか』

ツナ、と呼びかければ。瞠目したその人は、泣き笑いのように顔を歪ませて。

『いくらでも』

記憶にあるよりもずっとしつかりとした腕に、痛いほど包まれて、彼は涙が滲むのを感じた。

『…ナ、ツナ、ツナア…！』

『ランボ。…ごめんね』

その言葉が何を示すのかは、感情が高ぶってしまったて、目を見なければわからない為に確認することはできなかった。

泣き止むまで抱きしめられ続けて、最後に、『…オマケ』と額に口づけられて。

『…さようなら』

『さよなら』

笑顔で、別れたのに。

ボンゴレファミリーの本部である『城』の崩壊が告げられたのは、その数日後。

多くの犠牲。その殆どがファミリー内で“膿”と呼ばれた者たちだったが、その中にボスの名もあった。守護者達が必死で手を尽くしたが、遺体を見つけることは出来ず、炎を失った死炎書が、その人の最期を示しているだけだった。

「ハッ！！　　ッハ、ッハッハッハッ……」

それは悪夢。大量に汗をかきつつ息切れをしながら目を覚ました彼は、ベッドサイドに置いておいた飲料水のペットボトルを取り、一気に半分ほど飲みほした。

「…ッ、っそ、」

あの人と再会する前から見ていた夢は、再開した後会わなくなつてからより内容が明確に、目覚めはより酷くなった。

（…ツナ）

重なる、二人の優しい笑顔。

片方は、彼の知る存在ではないと、その瞳に宿る感情が全く別物であることからよくわかっていたけれども、焦がれる心を止めることはできなかった。

コンコン

「誰」

「わたし」

「ああ…どうぞ」

入ってきた女性は、その片目を眼帯に覆われた秀丽な顔を顰めて、まだ寝ていたの、と言った。

「すみません。今起きたところです…髑髏嬢」

「…ちゃんと起きて仕事しないと、ツナに会うのが遠くなるわ」

「はい、わかってます…」

わかっていても、毎日悪夢を見てしまう。…悪夢だけでも、それは幸せな記憶も兼ねている為、目覚めたくない衝動に駆られてしまうのだ。

「…日本に戻った時、雨の人に会ったそうよ」

「…！ では後は、六道氏、だけですか…」

「…そうね。骸様…どうしているのかしら」

ポツリと言いつつ、彼女は彼に着替えを手渡した。

「急いで。十五分後、会見」

「っっ！？ うわわ、急ぎますっっ」

時計を見て本日の予定を思い出したらしく、慌てて飛び起きた彼に、背を向けながら肩を竦め、彼女は部屋を出て行った。

「ランボ」

昼過ぎ。一段落した仕事に、ぐったりとしていた彼のもとへ、彼女がやって来た。

「…何ですか」

「あの人が、今日の午後空いてるかって。空けてきたから行きましょう」

「……………!?!?!? いや行きますけど、空けていいんですか!?!?」

“あの人”。示す人物は、彼女が無理矢理予定を空けるくらいだ、一人くらいしかない。

しかし、午後の予定も確か人と会う約束だったような…?、と盛大に首を傾げる彼に、しれっと彼女は頷き、言った。

「大丈夫。」

「いや、何が大丈夫なんですか…?」

「そりゃ、会う相手ってのがオレだからな」

キィ、と独特の音とともに開きっぱなしだった扉の影から現れた人物に、彼は瞠目した。

「ディーノ氏! ……そうか、次はキャバッローネとの…」

「本気で忘れてたのか」

普通なら機嫌を損ねてもおかしくないが、彼らはそれなりに親しい仲だった。車椅子に乗っているキャバッローネ十代目はからからと笑って彼に近づいた。

「…ご機嫌麗しゅう、ドン・キャバッローネ。」

「んー、まあいいか。そっちも元気そうだな、ボヴィーノの名代。」

高齢のボス、その後継が定まっていなかったが故の、名代という地位。彼はそれだった。

「ええと、それじゃこれから…?」

「おう、オレんとこの車で行く。目立つ格好はすんなよ」

「はい」

その地位を任されることになった時、あの人が力になってくれる人を紹介するよ、と言って紹介してきたのが、今現在彼のスケジュールのほぼ全てを管理し、彼の仕事を手伝ってくれている彼女、クローム・髑髏だった。驚いたことに彼女はあの人と同じ年で、その上で幼馴染であるらしい。かなり信頼している様子に、かなり嫉妬したことはあの人だけには秘密だけである。

そして、名代という地位、あまりにも年若であることに、彼の存在は公然の秘密とばかりに秘された為、以前のようにあの人と気軽に会うことができなくなってしまった。

『立派になった姿に会える日を、楽しみにしているよ』

言われた言葉は、楔のように彼を縛り付けた。同時に、彼女も。だが、今回、あの人から「会おう」と言ってきているのだ。躊躇う理由はない。それでも、一応一目は気になるのだらう、だからボンゴレと親しいキャバッローネを通したのだ。

「うう、緊張する…」

「……ボスは優しい。何も気にすることは無いわ」

「：髑髏嬢、失言です」

「うるさい」

「はは、お前ら仲良いなー」

聞いたところじゃ、ツナに引き合わされた時が初対面だったんだろ？何でそんなに仲良いんだ？

部屋を出て、彼らの数歩手前を進んでいるディーノが、首だけ振り返って彼らに問うた。

問われた方といえば、顔を見合わせ、

「「ただ、ちょっと知り合いだっただけ（です）」」

またそれかよ、という笑い声には、二人とも笑顔で応えるのだった。

コンコン

「ツナー、入んぜー」

ノックの意味があるのかないのか。返事も聞かずに扉を開けたデイーノに呆れる彼らだったが、室内にいた方は予測済みだったらしい。

「お元気ですか、デイーノさん」

「見ての通りだ」

「……では、身体の調子は？」

「すこぶる良いぜ。とはいえ、やっぱりこれは手放せねーけどな」

これ、と言いながら車椅子のひじ掛けの部分と軽くたたいた彼は、
「お前、またこっちに医療班派遣してくれただろ？ 感謝してる。」
と続けた。

「…元はといえば、オレが原因ですから」

「そんなことねーって。 ま、そんなじゃ、オレは仕事を果たしたってことで、いいのか？」

「ああ…ヴァリアーの方へ寄って頂けますか。」

「りょーかい。じゃ、またな」

「ええ」

部屋の外に控えていたキャバッローネの部下とともに、ディーノの気配が遠ざかった頃、あの人は漸く口を開いた。

「…さて、久しぶりだね、ランボ」

「…お久しぶりです、ボンゴレ」

何か他にも一杯久しぶりの顔触れがあるけど…！！

「「ランボか？」」「…君、もっと子供じゃなかったっけ」

「三人とも何言ってるの？ ランボは武の一つ下、了平君と恭弥君の二つ下なだけだよ」

「「「は？？？」」「」」

本気で混乱しているようだ。

無理もない。オレだっていつだったか、マフィアのパーティーで

獄寺氏に初めて会った（：再会した？）時心底驚いた。

「元気に頑張ってるみたいだね。報告は受けてる。頑張ったね」

さあ、おいで

「：っ、ボンゴレ、オレはもう子供じゃありませんっ！」

「あれ？じゃあご褒美の“ぎゅっ”は無くてもいいの？」

「つつっ：！！！」

それを言い出したのは自分なのだけれど、この状況で持ち出さなくても良いじゃないか：！！と彼は思った。何せ、周りからのやや殺意の混じっているように感じる気配が怖くて仕様が無い。

しかし躊躇いも束の間、このままこうしていても仕方ないと彼は開き直すことにした。時間は如何様にも人を変えるのだ。

「っと」

少し勢いがついてしまったが、しっかりとした腕の中に迎えられ、彼はほっとした。同時に、息苦しくもあるのだが。：その力強さは、“ツナ”との別れを思い出させるから。

「よしよし。：で、何で四人ともそんな目を向けているのかな」

「「「そいつを離れたら 言う／言います」「」」」

「いや、何か殺しそうな目をしてるんだけど。駄目だよ、中学生がそんな目してちゃ」

「：ツナ、貴方が言えた義理じゃないわ」

「それはリボーンに抗議しないとね」

「「「：、え？？？」」「」」」

一切気配を感じてなかったのだろう、突然聞こえてきた女性の言葉に、四人は気が削がれきよんとしてゐる。

「「「…髑髏？」」」

「ん、風のことかも知ってるの？」

「「「“風”！？！？」」」

「…そう呼んでゐるのは、ツナともう一人だけ」

むす、と彼女が意見したのは無反応の四人。

（ううん…混乱してゐるんだな）

仕方ないけど、と思いつつ、彼は抱きしめる手を緩めてくれるよう促した。

「ってか、何でお前、」

「…何が？」

「極限お前幾つだ？？」

「……」

「答えろよ」

「女性に年齢聞いちゃいけないよ。…まあ、オレと同年なんだけど。それが？」

「「「「同年！？」」」」

詰め寄る三人（残る一人は眼光が物凄く鋭い）に、あの人が割り込んだ。

「何だよ、何でお前だけ…っ！？」

「…知らないわ、そんなこと」

「っ！ アイツが関係してゐるんじゃないだろうな！？」

「…誰のこと？」

「果実頭に決まってるでしょ」

「…わからない。連絡…取れないし」

ポツリ、と言う彼女に、あの人がもうやめろ、と再び割り込んだ。
：彼女があんな風に弱々しくなるのは、六道骸の関わる話題が出た時だけだ。彼もそれを知っていたし、そうなった彼女はやや情緒不安定で危険なところがあったから、その庇うような姿勢にも納得がいった。

「とにかくみんな、落ち着いて。喧嘩させる為に集めたわけじゃないんだから」

殆どの面々がハッとして、黙り込んだ。

「今日ここに呼んだのは、オレの知る限りで“オレの知らないオレ”を知っているらしい人物だよ」

間違いは無いよね？

神妙に、全員が頷き、あの人に促されてそれぞれ席に着く。

「何で君達にそんな記憶があるのかは正直皆目見当がつかない。何となくトウリニセツテが関係しているような気がするだけ。だからこうして集まって、軽く話し合いでもしてみようと思って」

「…トウリニセツテが関係してるの？」

「そんな気がするだけだよ、風」

その言葉に、あの人と言うなら間違いは無い、と口々に言いだす残りの面々。

「…何でそう、確信持って言えるかな…？」

「十代目、御自身の超直感を舐めてはいけないと思います。」

「そうよツナ、虹の子達だって言ってたわ」

「…：…そもそも君、それなりに自信が無かったら口に出さないタイプでしょ」

ああ確かに、と頷く人々。

「って、話脱線してるし。そうじゃないんだよ、あー、でもどっから話せば良いんだ？」

がしがしと頭を掻いて悩んでいる様子のあの人に、幼馴染である彼女が言った。

「最初から、話せば良いと思う」

ツナのことなら、彼らは何でも知りたいはず

「…風サン。ニュアンスが何かおかしい気がします。っつーか何で目が輝いてんだ君ら」

呆れた声に、全員から非難の声。

「ハイハイ。オレの話ねえ。じゃありボーンとの出会いからとか？」

「ちなみに髑髏と会ったのはいつなんだ？」

「んー？幼稚園に入る、前？ オレはよく覚えてないんだけど」

「「「「そんな前から！？」」「」「」」

「…って、アホ牛は知ってたんじゃないかねえのかよ」

「そこまで聞いてなかったんで…」

そこで、あの人から、そりゃ幼馴染なんだからそんなもんでしょ、という言葉がかかり、一同脱力。

「でー、オレ小学校に上がってすぐの頃くらいまでは身体弱くてさ、小学校とか中学の頃はドジばっかやってたなー」

「身体弱かったって、持病か？」

「いや、よくわかんないんだけどね、了平君。しょっちゅう熱出して倒れてたけど。まあ、そんなんでやっとこさ高校に入学してすぐの頃、リボーンが現れたんだ」

記憶に在る時期と少しずれていることに、内心首を傾げる元守護者達。

「いやもう、高校三年間みっちりしごかれた。凧もいつも付き合わせてさ。大変だったよね」

「……有意義だった。」

「凧はそう言うけど、オレは大変だったよ……」

たそがれるあの人に、獄寺が恐る恐る、といった様子で声をかけた。

「しかし、その頃確か、何度かイタリアにいらっしやいましたよね……？」

「ん？ ああー、そうだね。九代目との面会とか会見とか面会とかで。ああ思い出してもウゼエ」

「……ツナ、本音出てる」

「いいじゃん別に。今更クソジジイの悪口聞かれたって、誰も文句言わないし。ああ、でもザンザスが嬉々としてジジイのこと抹殺にかかるか」

それは困るな。

「……九代目と、仲が悪かったの？」

「んーそっか、了平君も恭弥君も結局オレと九代目が一緒にいる場面とは遭遇してないのか。うん、過去形じゃないよ。」

「…つまり、今も極限仲が悪いわけだな…」

「……………城の門の周囲に植物の気配が無いのは、まいた塩の量が原因」

「塩じゃなくて塩の量か…」

ふふふふ、と遠い目に棒読みで笑っているあの人に、ぽそりと幼馴染の彼女が付け加えた事実は一同をちょっぴり戦慄させた。どんだけまいたんだ。

「…で、獄寺は何でそんなこと聞いたんだ？」

天の助けとばかりに、山本の質問に獄寺は嬉々として返した。

「オレが十代目を初めて拝見したのが、六年くらい前に出たパーティだからだ」

「そーいやクソ…、九代目に押し付けられて、何度か行っただけ。」

途中何度かリボーンに押し付けただけ」

「それで他の虹の子と遊んでたのがバレて、お説教」

「風も同罪だったけどね、あれは。いやあ、コロネロとリボーンがマジ喧嘩始めて、ラルがすごーい勢いでキレてさー。びびったなー」

「…それと、ツナ、緑の子に拉致られたわ」

「拉致って…。まあ間違いじゃないけど。別にヴェルデは悪い奴じゃない…、悪い奴か、アレ。うーん、良いところもあるんだよ、あれで。」

変わってるけど。変人だけど。マッドだけど。」

前世ではあの人の命を狙った人物の名に、幾人かが瞠目する。

「でーまー、高校卒業と同時にイタリアまで拉致られて、…継承式して、こっちで大学飛び級で卒業して…今に至る？」

（…（…（色々はしよった…））））

「継承式って、どんなのだったんだー？」

山本の、その無邪気な質問に、空気が凍りついた。

「…：オレは、その話したくないから。知りたいんならオレは出てくから、風かランボに聞いて。」

鋭い目。怒りを堪えているような、そんな眼差し。そして、誰も返事する前に出て行ってしまった。

「…何があったの？」

雲雀が、鋭い目つきで名指しされた二人を見つめた。

「…人が死んだの。ツナの…親友が、ツナを、庇って」

「ディーノ氏が車椅子生活を余儀なくされているのも、継承式が原因です」

顔を見合わせた二人は、どこか痛みを堪えるような顔をして、交互に話し始めた。

「どういう、ことだ？ シモンファミリーか？」

「いいえ。…ボンゴレの親友というのが、そのファミリーの十代

目ボスです」

「古里炎真が?!」

「そう。ツナの言った通り、拉致の様にイタリアに来たわたし達が、初めて出会った同年代の人だったの。それで、ツナと彼はすぐに仲良くなったわ」

「そもそも、この世界ではザンザス氏が遠縁ながらボンゴレの血を引いているということがわかっていて、養子ということもみんな知っているんです」

「……ということは、“揺りかご”は起きていない？」

「そういうこと」

そこで二人は一度口を閉じた。空いた時間、聞き手になりつつも合いの手を入れていた方は、聞いた情報を改めて胸の内でも繰り返す。

「元々、九代目とは折り合いが良くなかったとオレは記憶してるんですが…髑髏嬢、」

やがて口を開いた彼に、彼女はこくりと頷いた。

「そのこともあってか、ザンザス氏とボンゴレは仲が良いようで…。」

「みたいだな。」

「獄寺は知ってんのか？」

「ヒバリが暴君扱いされてんのに、前は同じように暴君として有名だった奴の名前が出てこないのが気になってな。一回十代目に聞いてみたら、よく酒杯を交わす仲だとおっしゃっていた」

そうなのか…と一同やや呆れが表情に出る。

「…継承式の数日前、ツナは言ってたわ。『嫌な予感がする』って」
そもそも、わたし達は継承式のことを本番当日まで知らされていなかったの

「ちなみに、オレを含めた周囲は、準備の始まった一週間ほど前からボンゴレとの接触を禁じられていました」

「ずっと、虹の子達ともって一週間以上前から修行三昧。おかしいとツナと二人思っただけ、文句なんか許されなかった」

それで、これで終わりだって言われて、やっと城に戻れたと思ったら今度は、すぐに着替えろって言われて。

「継承式に出たボンゴレは、とっても怒っていました」

それはそれは、とても。オレもちょっと近寄りがたかったくらいで。笑顔で呼んでくれなきゃ近づけなかった。

「始まる直前までどこか不安そうにしていたんだけど、九代目と何か話した後は少し落ち着いていたみたいだったわ」

「始まってしばらくはずっと、近づきたいオーラを出していて、オレや髑髏嬢、ディーノ氏に古里氏くらいしかそばにいなかったんです」

「…そして、事は起こった」

二人の他にも十代目候補者がいたことは知ってる？

「……まさか」

「まさか、でした。…残る候補者達が結託し、九代目への抗議を込めて、ボンゴレを狙ったんです」

「わたしとランボを庇ってキャバツローネの人が重傷を、ツナを庇って……」

「倒れた古里氏をボンゴレが咄嗟に抱きとめてましたが、既に事切れていました」

「少し茫然としていたツナは、敵が更に攻撃しようとしているのに気付いて、すぐに反撃したの」

その時、今まで欠片も使えなかった零地点突破を使った

「欠片も使えなかった」？

「…零地点突破も、？バーナーも、それらの派生の技も…、全て、避けられない大きな戦いの為、編み出された技だった」

確かに、と頷く元守護者達。

「ツナは、そういう戦いを経験してないの。流されて…かなり嫌々だったはずよ」

けれども、九代目に見出されてしまった。

「ボンゴレが零地点突破を使ったことで、事態に收拾がつき、皮肉なことに誰もから認められる存在となりました」

当時、九代目以外に、零地点突破を使える人がいなかったそう。

「…今の話で気になったことがあるんだけど。あの子…かなり頑固な性格だったでしょ」

それなのに、流されてとはいえ、素直に言われるまま、ボスになろうとしていたの？

「…奈々さんの為。ずっと、心配掛けてきたから…、彼女の言うことなら何でもする、っていうツナの性格を利用して、虹の子達を使つて九代目が外堀をうめてたの…」

「「「「何（だ／ですか）ソレ非道…」「」「」」」」

「それがわかったのも、最近のこと。雨の人と会いに日本に行くちよつと前に連絡貰ったから」

ツナ、だいぶキレてて、次会った時はもう顔面に濃度100%の塩水ぶっかけてやる…って言ってたわ

「…塩を塩水?？」

「更に、濃度100%でもっと嫌がらせ、と。極限相手自身にかけるというのもそうであろうな」

「時々ボンゴレ、気の回し方が変なんですよね…」

さっきだつて…と、“ご褒美”のことを思い出した彼は、不穏な空気になりかねないことに気付き、慌ててやめる。

「？」

「な、何でも無いです。それで、その日を境にボンゴレは九代目とかなり距離を置くようになりました」

「同時に、ボヴィーノの方でちよつと色々あって、ランボがファミリーの仕事をしなくちゃいけなくなったから、わたしはその手伝いをしてやってくれてツナに頼まれて、直接会ったのは数年ぶり」

「右に同じくです。…オレの場合は連絡すら取ってませんでしたけど」

はふ、と彼は息を吐きつつ言って、ソファに身体を沈めた。

ふと、思い返すのは今世、あの人と再会した時のこと。

まだまだ幼い時分の彼は、思うままにあの人に走り寄り、抱きついた。そんなことをしてはならないと、理性ではわかっている、身体も中身すら殆ど子供であつたから。

そうして伸ばされて、泣きじゃくる彼を撫でた優しい手。落ち着いた声が彼を宥め、更にはいつかと同じく、額にキスをされた。

『オマケ。』 ……台詞すら、同じ。

ご褒美が、『ぎゅっ』になつたのは、その頃の名残。あの暖かい腕の中に、もう一度…そう、ずっと、願っていたから。

嵐の場合

『君はオレの最も信頼する右腕だよ。』

『勿体無い御言葉です、十代目』

その言葉を聞くことは本当に少なかった。あの方はそういうことを滅多に仰らない謙虚な方であつたし、そこに至るまでオレ自身かなりの外的な行動をとつたものだった。だからこそ、その言葉を初めて頂けた時は、本当に、嬉しかった。

『他のどんな言葉よりも、こっちの方が君は喜んでくれるかなと思つて』

『はい！ 有難う御座います…！！』

優しい笑顔。 ずっと変わらない仕草。 どこまでも素晴らしい御人柄。

どれほど、想い焦がれたことか。 —— けれども。

『好き、だ』

『ツナ…』

あの方の想いは、中学時代からの友人に向けられていて。友人の方も、同じ想いを抱えていて。

…全く同じ想いを、彼も向けていたというのに。 あの方は、そのことには気付くことはなく。

『……ッッ』

人知れず、言葉を呑みこんだ。唇を噛み締めた。恐らく彼以外誰も知らない、二人の想いを、じっと見守り続けた。

“最も信頼する右腕”、その言葉こそが彼を支え、彼を彼たらしめるものとなった。彼の生きる意味、そのものと。

だって、その相手は彼にとってももう、言葉ほど内心では馬鹿に出来ない、大切な友人だったのだ。

だって、あの方は彼にとって何よりも優先すべきヒトで、優先したいヒトだったのだ。

だから、見守り続けた。そして、自身の居場所だけは譲らなかった。絶対に、絶対に……絶対に。

物心ついたときから、環境に違和感を感じていた。

既視感を覚える景色。妙に感じる温度差。己の境遇に苛立ちを覚えるとともに、そんなもの感じる必要はないと告げる自分がどこかにいた。

曖昧な感覚に揺蕩って過ごすうち、ふと“以前”は何かしら負けたこと、逃げていたことに立ち向かっていく自分がいた。

そして気付けばそこは、見知らぬ場所だった。

あの方と出会う糸口を見つけたのは、父親の主宰するパーティだった。勿論マフィア関係だ。

いつものように姉の差し入れを口にせぬよう頑張りつつ、ピアノに向かったその時、視界に入ったその人に、目の前が真っ白になった。

記憶に在るよりも随分と高い身長。黒服。何よりも特徴的な髪型と…、普段は片時も離さなかったその、ボルサリーノ。

次の曲を始めようと鍵盤の上に置かれていた手は、気付けばそこから離れ走る為に振るだけのものと化していた。

『リボンさんっ!!』

『!?!』

業界最高峰ヒットマンの名を、躊躇いもなく叫び呼んだ子供は、後にも先にも彼だけだっただろう。

そもそも、パーティに参加していたからといってその人が、たかが子供に気取られるような様子でいるわけがないのだ。

その人に気づけたのは、ひとえに彼が前世で努力した結果の賜物だった。

「みんな、話は大体終わった？」

ノックと共に戻って来た十代目である男は、開口一番にそう言った。

「…大体終わったわ、ツナ」

「そっか。実はこの後、とあるファミリーの代表と公然の秘密の極秘会合を予定してるんだけど…」

「……極秘なのかそうじゃないのかどっちなの？」

「建前上は極秘。でも何か情報が漏れてるんだよねー。たぶんアルコバレーノの誰かが漏らしたんだと思うんだけど…」

アイツらしつこいたら。

「どこのファミリーなんですか？」

“アイツら”の示す相手がどちらなのか少し気になりはしたが、取り敢えず一番最初に疑問に思ったことを彼は問うてみることにした。

「エストラーネオ。」

何年か前、妙な人体実験をやっているとかいふ噂で…と続けられている言葉は、誰一人として耳に入っていない様子だった。

「…エストラーネオ、ですか…？」

「え？うん。だからそう言ったじゃん」

不思議そうな顔をする男に、一様に瞠目したまま、何と反応すべきか迷っている面々。

「？？ みんな、どうしたの？？」

「…ツナ、エストラーネオファミリーとは敵対してたんじゃ…」

「ああ、風とこっち来た頃はまだ、ね。それよりもずっと前、風なしでこっちに来させられたときに、噂の実態を確かめて来いって、チェデフのメンバーと放りだされたんだよね…」

で、あまりにも酷い状態だったからついキレちゃってさー、めっちゃくちやにしちゃったんだよねー

あまりにもあつさりと言うので一瞬流しかけたが、よくよく考えれば凄い言葉である。

「そこから、比較的ボンゴレと持ちつ持たれつやってたエストラーネオの同盟ファミリーが吸収して何とか盛り返したらしくて、一応傘下みたいな扱いになってたんだけど。一年くらい前からかな、まあ同盟組んでもいいかなってぐらいの評判になってるんだよね」

で、今日はその相談、みたいな感じかな。

「…まだ傘下じゃなかったんですか」

「一応ねー。まあ名前だけ、って感じ。結構前から打診はあった

んだけどさ、なーんかアルコバレーノの驚いたことに過半数が駄目だって言ってくるもんだから、中々許可できなくて」

「アルコバレーノの、過半数…？」

「うん。リボーンにマーモン、コロネロ、ラル、スカル、あとユニ。風とヴェルデは一応話はされたけど駄目とは言われなかったな…：推奨もされなかったけど」

それって駄目って言われているようなもんじゃ…と全員の口からそれぞれの言葉で出てきた感想は、男のにつこり笑顔で黙殺された。

「…ってかさ、ツナ、そんだけのアルコバレーノとどうやって知り合ったんだよ？」

そもそもの話、マーモンとラル・ミルチを除けば、残るアルコバレーノ全員は一応ボンゴレと関わりは無い。リボーンはボンゴレに雇われている身であって、属しているわけではないのだから。属している二人とて、身を置いている組織はボンゴレ本部とは少し隔絶している。

「んー？ リボーンは元家庭教師だし、マーモンはヴァリアーとの会合で、コロネロは…リボーン繋がり？ラルはチェデフと行動を共にさせられた時で、スカルはそんな時偶然やりあった敵ファミリー。ユニは同盟ファミリーで、風は…何だっけ？」

「…：日本にいた頃」

「ああ、そうだ。リボーンが来る前、学校サボったら不良に絡まれてさ、そんな時ポッコボコにしてくれたんだよ。後で風と二人でお説教されたけど。んで、ヴェルデは…何か知らないけどオレのこと気に入ったらしくて、拉致られて人体実験させられかけた。」

「「「「人体実験！？」」「」」」」

「未遂だよ、未遂。色々あったけど、今は比較的友好関係だから

さ。ちょっと見返り高いけど」

「……ちょっとじゃない」

「…風、何でそんなに怒ってるの…?」

ふい、とそっぽを向く彼女に、男は困ったような顔をする。その光景に、一同が首を傾げる。そして五対の純粋な目が男に向けられ、と男は言葉を詰まらせた。

「……えーと、三日三晩、二人っきりで一緒に過ごす、みたいな…?」

「それが極限何故髑髏が怒るようなことなのだ??」

「…昔、三日間一緒に過ごしたら結婚したことになった」

「「何百年前の話（だよ）…」」」

彼女のそっぽを向いたままの台詞に、生粋の日本育ちの黒髪二人が呆れたように突っ込む。しかしながら、今度は男が目をそらした。

「「「「え??」」」」」

「いや、まあ…うん。この話はこれくらいにしようか。えーと、エストラーネオの話だったよね」

誤魔化した…と一同の内心が重なった。

「日本に行く前ようやくリボンが折れてくれたから、翌朝のうちにさっくりとスカルとコロネロも折って、同じ日のうちにマーモンも絆しておいたし…」

「（（（（（“さっくり”???））））））」

「ラルとユニは個別でちょっととした約束したら、まあオツケーだったから今日、無理矢理予定入れたんだよね」

「…デート？」

「…、黙秘」

（（（（デートか…）））））

今度はじとつとした髑髏の目線に、再び目をそらした男。やはり一同の内心が重なる。

「……だってさあ、ラルは兎も角最近ユニまで不穏なこと言ってるし…。確かにオレは流されるタイプだから、上乘られちゃったらやつちやうけどさあ…たぶん…」

「…ツナ、たぶん今一番貴方が不穏なこと言ってるわ」

「へ？ あ、口に出てた？ うん、みんな、気にしないでね」

（（（（（気になる…））））））

何かしっているらしい髑髏の、少し苛ついているような様子も気になるが、それ以上に若干挙動不審な男の言動の方が気になる面々。

「えっと。まあそういうことだから、この後エストラーネオの代表と会うんだけどね。みんなも行かない？」

「「「「「は？？」」「」「」「」」

思わず、といったように六人の言葉が重なる。

「あ、の…オレ達なんかが行っていいんですか？」

「公然の秘密とはいえ極秘の会合だからねー。こっちが格上だし、文句は言わせないって」

にこにこと告げられれば、反論は出ないわけで。寧ろ、欠けている元霧の守護者がいた、あるいはいるはずのファミリーとあって、全員が気になっているので。

「行く」「行きます」「行くぜ」「行くぞ」

揃って立ち上がった。

「さて、ここだよ」

男の案内でやってきた部屋は、城の入り口近くにある接待室だった。

（本当に公然の秘密なんだな…）

彼はそう思いながら、ノックをして、返事を聞かないまま部屋に入ってしまった男の背中をじっと見ていた。

男に続いて六人が部屋に入ると、見覚えのある、がたいの良い長

身の男がいた。

「久しぶりですね、ランチアさん」

「…ああ。元気そうで何よりだ、ドン・ボンゴレ」

「やだな、そんな固くならないで下さいよー。それで、そっちは？」

恐らく、あのにこにこ笑顔で話しているのだろう男の言葉に、ランチアの背後にもう一人いることに彼らは気づく。

「…ウチの筆頭戦力だ」

「へえ。珍しい目だね。名前は？」

“珍しい目”。男に遮られ見えない彼らは、その言葉にハッとした。

「……六道、骸、です」

「骸様っ…！」

その言葉を聞くや否や、男の真後ろにいた彼女が飛び出した。

「っ、風!？」

「骸様、」

「え、風」

そして勢いのまま、抱きつくようにかの男に体当たりをした。

（あ、よろけた…）

以前…前世ならいざ知らず。年齢差故にできた体格差は、性差に

比べてまだ少し大きかったらしい。

「あっ、…ごめんなさい」

「いえ…貴女、なぜ、イタリアに…」

「それは…」

「それに今…、…ドン、ボンゴレは、凧のことを…」

「ん？ オレが何？」

「…あの、いえ」

六道骸の口籠る様子など、滅多に見られるものではない。というか、彼も含めた元守護者男勢は全員啞然としていた。

「…？ 別に今は堅苦しい場じゃないから、大抵のことはお咎めなしだよ？」

何を気にしているのか、と首を傾げている男に、内心で彼は同意しつつも、男の戸惑いもよくわかる、と遠い目になった。

「…何故、凧のことをその名で呼んだのか、と…」

「幼馴染のこと名前で呼ぶのなんて、そうそう珍しくないだろう？
って、まだ幼馴染って言ってなかったか」

「お、幼馴染！？」

このような素っ頓狂な声も珍しい。というか有り得ない。

（……まあ、何も知らなければ驚くよな、普通は）

うんうん、と頷く彼は、自身も体験したことに思いを馳せる。

「…この感じ、骸君も君達と同じなのかな？」

首だけで彼らを振り返って尋ねる男に、はい、や、そうだぜ、など、肯定の返事がそれぞれに返る。

「…」

男の影から微かに見えたオッドアイの少年が、啞然としているのを、彼は何だか腹を抱えて笑いたくなるような気分で見た。

君付けなんてされたことないもんな、という気持ちは、何故か歪んだ優越感を感じさせた。

「取り敢えず、座ろっか？」

そういえば、今まで立ったまま話していたのだった。

促されるまま、示されたソファに座っていく。

「今回は例の同盟の話でしたよね？ どうして、彼を？」

「…ボンゴレが色々やらかしてくれた後、主力がどうしても若い世代しかいなくてな。こいつはその中でも一二を争う、術師だ」

「術師…なるほど」

即戦力の殆どは、人体実験で潰されてましたもんね。

「ああ…。こいつの力あってこそ、何とか盛り返したと言えるな」

「へえ。それで、今回は何故？」

「…まあ隠していてもいずれ知るだろうからはつきりと言うが、同盟を組みたいなら見返りを、という声が何処からか聞こえてきていてな…」

「なあるほど。…後でザンザスに連絡しよう」

ふふ、と笑う男に、ランチアは少し目線をそらし、六道も若干瞠目していた。彼らにしてみれば男の表情は見えない位置にいたので、一体どんな顔をしたのか物凄く気になるところである。

「それで、所謂彼は、貢物、ですか」

「一概には、言えないがな。……中々カリスマもある。こいつがいなくてはやる気をなくす奴らもいる……、それだけ、賭けている言ってもいい」

「それほど？……そこまでの理由が、ありますか」

「しかしなボンゴレ、こいつを至上とする奴らでさえ、貴方のことは多少なりと認めているんだ」

「え？」

それは凄いことなんだ、とランチアは男の不思議そうな声を遮り、続けた。

「自分たちもマフィアの一員であることに自嘲しながら、マフィアを毛嫌いする連中が、だ。……寧ろ、大マフィアに庇護を求めるならボンゴレでないと、内部紛争が起きるだろう」

「……それはそれは、大変ですねー」

その直感でもって、男はランチアの言葉の真偽を誰よりも知っているはず。

腕を組み、やや茶化すような口調ではあったが、男は真摯に受け止めたようであった。そして、ずっとランチアと目線を合わせていたのを、その隣の少年へと移す。

「それで、君はそれでも良いの？」

そんな扱いを受けていて、不満はないのかと、男は問うた。

「…ボンゴレ」

「うん？」

「僕はあの日、貴方の姿を見かけました」

「あ、そーなの？」

「最初は、炎を身に纏った鬼かと思いました。世の中には、六道を巡った身である僕の知らない鬼もいるのだなと、死にかけの身で感心しましたよ」

「…これは褒められてる？ 貶されてる？」

彼らを振り向いて聞くので、彼は思わず、果たしますか、とつい口癖が出る。

「いや、それは困るから今のところ駄目。あ、ごめんね、続きをどうぞ」

「…しかし、次の瞬間に貴方が誰かわかったとき、わけがわからなくなりました」

「？」

その声が、彼には震えているように聞こえた。

「だから、もう、良いのです。…一度得たはずの安息が、そうでなかったらしい今、僕にできるのは再び、その安息を得られる日を待つこと…」

「骸様、それは、」

「クローム。…だから、貴方が許してくださるのなら、どうか、お側に」

名前を呼ぶだけで、彼女の言葉を封じ、六道は淡々と続けた。けれども、彼にはどうしても、その声が震えているように聞こえるの

だった。

「…許すも何も、ねえ。ま、君がそれで良いって言うんなら、いいんだけどね。別に」

じゃあちよつと、チェデフと口煩い幹部に連絡取らなきゃいけないでー。

「取り敢えずこれにサインお願いできますか？」

さらりと差し出されたのは、死炎書だった。

「…わかった」

ちらりとその内容を確認したらしいランチアは、すぐにペンを手にとった。

「さて、と…オレちよつと電話するから、みんな静かにね」

そう言って携帯電話を手取る男に、部屋を出ればいいものを…という呟きがどこからかもれたが、聞こえていないらしく、空で覚えていられるらしい番号を押してコールしだした。

「あ、ザンザス？」

（え、よりによってそこですか！？）

チェデフと幹部に連絡を…と先に言っていたのに、口頭で上げられた名前に彼らは目に見えて驚いた。

「何かあった？ 煩いけど。え？ あー…ゴメンネ？ えっとね、今夜

空いてる？ は？…もしかしてリボンもいるの？」

（何があったんだ…？）

「いやそれは困る。つかメンドイ。お前だけで来てよ。え？ いやマ
ーモン、お前割り込んでくるとか珍し…っいやザンザス破壊すんな
よちよっ…」

ああもうっ、と男は切った。

「…何かあったんですか？」

「向こうで電話破壊されたッぽい。オレ知いらねーっと。 えーと
メールメール…」

ラルだと怖いからバジル君でいつか…と、電話帳を操作しながら
呟いている。

（ヴァリアーには電話でチェデフや幹部にはメールなんスね…）

何というか、気が抜ける。

「…ボンゴレ、これは…これでいいのか？」

「サインしてから何言ってるんですかランチアさん。」

「いや…こっちとしてはここまでしてもらえと何だか申し訳ない
というか…」

「幹部連中は文句言うかも知れませんがねー。ま、ザンザスに今
夜辺りお願いしとくんで大丈夫でしょう。オレ、幹部って看板を背
負った自意識過剰馬鹿が大っ嫌いなんです」

クソジジイは古狸な分まだマシですねー。

ふふふふふ、と笑っている。

「…そうか」

物凄く何か言いたげだったが、呑みこんだらしいランチアに一同は内心同情した。

「さってと、これでよし。 …後は、んー、どうするかな…」

ちらり、と六道を見遣った男に、彼は口をはさんだ。

「あの、例の仕事に入れてはどうですか？」

「例の？ ああ、隼人君もこの間入ったあれね…まあ同じくらいの年代だし、妥当かなあ…」

けど、ランチアさんが絶賛するほどの術師だしなあ…

「…レベル差が出て危険じゃないかなあ」

「…：僕なら大丈夫ですよ？」

「いや勿論、君じゃなくて君に関わる構成員の方がね。 ああ、でも隼人君と組めばいいのか」

「「え…」」

それは嫌だ、と言いたげな顔が重なる。

「そんなに嫌？ あーそれなら…、術師ならマーモンもいることだし、一時的にヴァリアーにいてももらった方がいいかもなあ」

ザンザスなら対外的には目付役にもぴったりだし。

「…暗殺部隊ですか」

「まあ暗殺部隊とは名ばかりの諜報部隊になってるけどねぇ」

下手すりゃチェデフより優秀だからねー。

「…僕は、君に…ボンゴレに、従いますよ」

「わかってるよ。まあザンザスと話して決めるから、取り敢えずは
ー…仕方ないから隼人君と同じ配属でね」

あそこが一番、安全だから

「……わかりました」

「まあ確かに、安全、ではありますね…」

遠い目をして言う彼に、曖昧に男も笑いつつ言った。

「隼人君は、まあリボンからの推薦もあったし、立派な学歴があったから手荒なことしなかったからねえ。その点恭弥君と了平君は学歴ない分微妙な位置にいるけど」

「「「は??」」「」」

反応したのは国籍日本組と六道だ。ランチアは基本的様子を見て
いるだけだし、残りは事実を知っている。

「だって二人とも今のところ最終学歴小卒じゃん? 義務教育だからこっちでサボってもそのうち中卒資格は手に入るけどさ」

「…獄寺は違うのかよ?」

「この年で高卒の資格持ってるよ、ね?」

「…はい」

ええ!?!と反応が返る。

「何だってそんな…」

「んなもん、オレみたいなガキがボンゴレに入るには腕っ節だけじゃ無理だったのがよくわかってたからだよ」

ただでさえ、身分云々でオレは雁字搦めだからな

「…あー」

「テメエらもやる気あんなら今からでもやりゃいいだろうーが」

高卒資格くらい軽いだろうよ

「どーかなー…」

「笹川氏と山本氏はきついんじゃないですか、たぶん…」

「…同感」

「何だと、極限プンスカだぞ！ …まあ否定出来んが」

「………高卒、ねえ…」

「…さりと僕のこと無視してません？」

「テメエは幻術があるだろ。 …オレは、理詰めから入るからな」

よく言われていた言葉をポツリと彼は零した。

すると、ポン、と頭の上に誰かの手が乗るのを感じたので、相手を見上げる。

「頑張ったね」

撫でられ、真っ赤になると同時にほっとして、そしてほう、と陶醉する。

周囲から痛い視線を感じるが、彼は気付いていないことにした。だって勿体無い。

「…っと、この番号はラルだな…バジル君、言ったのか…もう…」

んじゃ、オレはランチアさん送りがてら連絡してくるから、風、みんなを執務室に連れてってくれる？

「ちょっと、アルコバレーノが暴れてるみたいでさ。收拾つけてこなきゃいけないから」

「…わかった」

携帯電話を取り出しつつの言葉に、頷いた彼女に促され、彼らは部屋を出た。

先に行っててね、と手を振りつつ部屋を出された。

彼は先導されずとも道を知っているので、一番後ろを進みつつ、部屋を出る直前に見た笑顔を思い出す。

（お変わらないな…）

尤も、変わらないというよりは、全く同じだ、と戸惑うところなのだろうが…、彼がリボンと接触し、必死こいてボンゴレに所属できるようになってから、何度も繰り返ししてきたので、いい加減戸惑いも慣れとともに薄れていくものだ。

（…けれど、あのように笑っていてくださるなら　――）

どれほど、気が安らぐことか。

前世の記憶。彼が最後に見たあの方の笑顔は、様々なオモイを隠した、複雑なモノだった。…どれほど満面の笑みを見たかだったと、後悔したことか。

彼の最期、その発端。それは、重傷を負って絶対安静を言い渡されていたあの方の恋人である、雨の守護者。その男とともに日本へ渡れという指示だった。

命令でなくお願いという言葉とともに告げられたその言葉の真意は、説明されずとも交わされた視線のみで彼には伝わった。

…そして伝えるつもりなど毛頭なかったのだろうあの方は、気付いてしまった彼をわかったのだらう、曖昧な笑みで頼むよ、と言った。

譲れぬもの。愛するもの。大切なもの。様々な“もの”に対するオモイ。

『ボンゴレ十代目の右腕』。そうなるために、そうであるために、彼が積み上げてきた経験。それが告げる、あの方の心。

ああ、と。言葉に出すことは無く胸の内で呟き、一瞬瞳を閉じた。過る自身の様々なオモイに蓋をして、彼は頭を下げた。

そして、御心のままに、そう、答えたのだった。

(…そして十代目は…)

イタリアで、独り。他の守護者をも寄せ付けず、闘って。彼は、あの方のもとへと行こうとする雨の守護者を、必死で押しとどめて。

『獄寺、お前はツナのそばにいらなくて平気なのかよ?!?!?』

平気なわけあるか。行きてえに決まってるだろ…!!

『オレが、アイツのそばにいらなくてどーすんだ、行かせろ、行かせてくれよ…っ!!!』

オレだって、そうしたいんだ。行かせてやりたいんだよ…っ!!

心はいつだって、悲鳴を上げていた。

でも、わかってしまったから。知っていたから。気付いていたから。

例え離れていても、この恋人達は心が繋がっている。片方が崩れれば、もう片方も崩れる。…逆にいえば、片方が無事なら、もう片方も決して有事ではないのだ。

だから本来は、彼はあの方の元に残りあの方を守っていたかった。何よりそれが望みで、そうであるべきだと思っていた。けれども。

『獄寺君、もしもの時は、オレじゃなくて山本を守ってね』

『…は…?』

『獄寺君はオレの右腕だもん。オレの言いたいこと、わかるでしょ?』

にっこりと、邪気のない、彼の一番好きな笑顔で言われた言葉。だからこそ胸に棘として刺さったように残って、離れてくれなか

った言葉。

十代目、十代目、じゅうだいめ。 そんな御言葉、聞きたくありません。でも、オレは、オレがオレとして在る為には、聞かないわけにはいかないんですね？ それはただの言葉の様で、お願いの様で、結果的に――― 命令なのですね…？

ずっと悲鳴のように心の中で叫び続けて。自身の心すら分解し始めているような気分になられてきた頃。 ……必死で、守り続けてきた相手を、死なせてしまった。

慟哭。悲嘆。後悔。懊悩。責苦。

残りは激情のまま、自身の役割のまま、怒濤の嵐と成り果てて、散った。

『オレを、ボンゴレ十代目に会わせてくださいっ!!』

『ナニモンだ、テメエ』

『このパーティの主催者の息子で、獄寺隼人と言います!』

『ああ…例の愛人の子か。…十代目、か。何故まだ表だって公表
されていない存在に会いたいなどと言う? しかもこの俺に』

『え…』

『十代目に確認したが、覚えはないそうだ』

『そんな…つつっ!?!? …直接会わせて頂くわけには…っ』

『前にも言ったが、テメエの身分じゃおいそれと会わせるわけには
いかねえな』

『…それならっ!! 決して二心は無いと、そして会わせるだけの
価値があると証明すればいいですか!?!?』

『大した執念だな…』

『筋金入りですから』

『はっ、口は達者だな。しゃーねえ、十代目本人から言われてる
からな、明日、会わせてやる』

『本当ですか…!?!?』

『君が獄寺隼人君? 初めまして、沢田綱吉です』

『獄寺、隼人、です…つつっ!!』

そこから先は様々な感情に駆られて、言葉にならなかった。

ただ、向けられた、笑顔に。前世、散る直前にもう一度見たか
ったと思った、その、笑顔に…心が、身体が、震えた――その
ことだけはしっかり、覚えている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3161y/>

今一度、貴方に

2011年11月24日16時57分発行